



Take free





- 05 屋上 鳩山豆子
- 06 デタラメ シーズンⅡ 詠人不知
- 08 触れる 一路真実
- 10 サブカル対談 鳩山豆子 × 一路真実
- 17 妄想百景番外編 マチコ=メスシリンダー
- 18 イヌとペンギン いちろまみ
- 22 VIVATAKE777のお悩み相談室 VIVATAKE777
- 24 ミツ目の猫たん マチコ=メスシリンダー
- 27 まともなアナタに贈る、あたしのまともな日常 一路真実
- 35 Philosophy of Stardustbooks
- 36 編集後記





## 屋上

待ちわびてカラスとダンス踊ってる歩道橋には夏風が吹く



人間の言葉をそっと囁いたおばけにそっと抱き寄せられて

愛を知ると世界が歪む。  
それがかまわない。

笑っても本気じゃないふりしたりして何を守っていたんだろうか

あの人は私じゃないから簡単に私のことを嫌いになれる

半袖を着ている人はもういない「会いたい」繋げて会いにゆく道

ああ行き止まりまで来てしまった。

好きになってほしいと言えばほしいけど屋上はもう夕暮れの中



デタラメ シーズンⅡ

詠人不知（よみびとしらず）

うだつのあがらない小生は、さっきから「ウ～」とうめき声ばかりをあげている。

それもそのはず、『う』から脱する事がなかなか出来ないのだ。

厳密には『う』が出ないと言っておいた方がいいのだろうか。

そんな事を考えながら、先程から一人悶々としゃがみこんでいる次第だが、ネクストステージ『え』はもう間近なはずだ、と己で己に自己暗示をかけるも、どうも胡散臭くてしょうがないのだ。

なぜに、なにゆえに、『う』を脱せないのだ。

あんなにも『あ』や『い』は、あっさり通過したではないか、バカっ。

不確かな記憶を辿れば、小生は家からダラダラと歩いて十分もかからない所に位置するパン屋にいる。

あ、今日は近所で幼なじみの海ちゃんに、ぼったり遭遇して、しどろもどろやっていたものだから、厳密には十五分かかったではないか。

まあ～そんな事はどうでもいいのだが、・・・いや、海ちゃんの事は、どうでもよくないのだが、時間の事はどうでもいいのであって、決して海ちゃんの事をどうでもいいと言いたかったわけではなくて、今日のパン屋までかかった時間のみが、どうでもいいのであるのだから、読者諸君には間違えないでいただきたい。

ちなみに、小生はカレーパンが大好きでいつもいただきます、という事を付け加えておこう。



さもすると、先程、冒頭で、『う』から脱せないあまりに、ぼ~っとして、あっさり通過したなどと言っておりましたが、これは完全に小生の見栄が見え見えのバレバレではないか、バカっ。

しかしながら甘いものが苦手だと考えれば、結構頑張った方でございます。

い、今、きてます・・・。

誰がって？

海ちゃんじゃないよ。

う、う、う、ウ～。

ダメだ。

先程、読者諸君が、小生と海ちゃんの遭遇、のちにパン屋のくだりを勝手に想像し、思い思いのキャストで映像世界を作り上げていた頃、小生は己で己に浣腸するという、ある種、汚い行為で『う』から抜け出そうとしていたのだ。

さもなければ、もうネクストステージもいじらしい。

甘いものが苦手なのに、大好物のカレーパンを今日はいただく、頑張ってアンパンを・・・ああああん。

つい口から出てしまった・・・。

なぜに、なぜゆえに、そっちから・・・。

追記として、また最初から始める事を余儀なくされ、次はアップルパイ、のちに椅子、いちかばちか海ちゃんへアタックするも、あっさりフラれ、またもネクストステージ『え』に辿りつけなかったのは、言うまでもない・・・。

触れる

一路真実

「さっきはごめん！ これ！」

男は小さな紙切れを少女に渡した。

「ちょっと……」と紙を返そうとしたが、男は逃げるように電車を降りてしまった。

小さく折り畳まれた紙を広げると、少女は硬い表情のまましばらく眺めていた。そして、その行為を見ていた周囲の大人に聞こえるように、「キモイ……」と呟き、紙を窓の溝に挟んだ。「少女」という生き物は、しばしばそうして他人が入って来ることを拒絶する。時折強烈に、嫌悪という感情を剥き出しにする。

「何が書いてたの？」

彼女は見知らぬ女性に声をかけられて目を見開いたが、一言、「電話番号とか」とうつむいた。

「ウケるね」

と言うと、その言葉遣いに誘われるように彼女はふっと口を弛めて、ようやく笑った。

「どうして、マアたんは生きてるの？」

窓から外を眺めていた幼児が、母親に聞いた。

「マアたんは、犬だからよ」と、母親が諭す。

電車が揺れる。大きな音が親子の会話をかき消していく。

小さな頃は、未知のものが怖い。だからこそ世界に対して、怖がりながらも触れようとする。幽霊や妖怪が怖い。病室でただ寝ているだけの人間も怖い。しかし、怖いからこそ、質問する。恐怖が、興味を生む。しかし、大人になったら気付くのだ。うまく生きるためには鈍感であること。何も考えず、恐れることもなく、鈍感に生きられれば幸せなのだ。目の前の出来事も日々の人間関係も、触れずに生きていけば、心の平穏が保たれる。何かあっても知らないふりができる。見なかった、と言える。

一方で、怖さを忘れることは、世界に対して興味を失ってしまうことと同じだ。自分と世界の間には深い壁を造ることなのだ。そうして、壁の内側でただひたすら世界が過ぎゆくことを願っている。その一方で、膝を抱え、ただじっと日常の平凡さを憂えている。

電車が駅に停まり、先ほどの少女が降りた。誰も乗って来ず、妙な静けさが車内に広がる。もう一度、幼児の音が響いた。

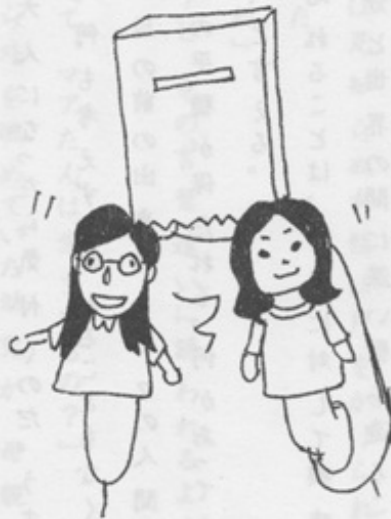
「どうして、生きてるの？」

—終—



# 鳩山 × 一路 サブカル対談

## 第3回



私たち2人が  
映画・小説・漫画等について  
好き勝手に語ります。

第3回目のテーマは、映画『悪人』です。

あらすじ

李相日監督『悪人』二〇一〇年制作

清水祐一（妻夫木聡）は、長崎の田舎で暮らす孤独な青年であった。佐賀の馬込光代（深津絵里）は、アパートと職場の往復だけの退屈な日々を送っていた。そんな二人が偶然出会い、刹那的な恋愛に身を焦がす。しかし、祐一には秘密があった。若い女性保険外交員（渡島ひかり）を殺害した犯人だったのだ。最初に犯人と疑われた大学生（岡田将生）も絡み、人間関係が交差する。なぜ祐一は女性を殺したのか？なぜ光代は殺人者を愛したのか？引き裂かれた家族はどうなるのか？誰が本当の悪人なのか？祐一と光代の逃避行が始まる。

鳩山…どうでしたか、一路さん。

一路…そうだね、面白かったよね。

鳩山…うん、面白かったね。今年公開された映画の中では、……イカの目とか。



一路:(笑)イカの目にフューチャーして、古い演出っていう感じあった。

鳩山:古いね。それが、重い演出っていう感じで。

一路:色合いも何だか暗かったし。明るい色使ってなかった。赤いフリースくらいかな。

鳩山:赤いフリースの深津絵里がまぶしかったね(笑)妻夫木くんの悪役がよかった。

一路:悪役なんだけど、でも良い人を感じさせる悪役っていう意味では、妻夫木くんはすごく良い配役だったと思う。悪人なんだけど、本当かなって思わせる何かが残ってる感じがすごく良かった。

鳩山:目とかね、すごく良かった。笑顔とかも。

一路:ラストシーンの夕日を見る顔とかね。鳩山:あーあそこよかったね。

一路:あの終わりで良かったと思った。鳩山:あの終わりで良かったよね。結局あのラストは、何だろうね。人の心の美しさ

って夕日を見てきれいって思うこと?みたいな(笑)描きたいことは分かるんだけど。

ど。

一路:深津絵里に見せようと思って、目隠しして階段を上がって行くじゃん。だから他の人も共有したいっていう感じとかかな。

鳩山:それを考えると、松尾スズキのあのブレのなさっていうのは輝いてたね。

一路:そうだね。典型的な悪人(笑)鳩山:妻夫木くんは環境が罪を犯させたっていう部分があったけど、一方であんなぶれない悪人も世の中にはいるわけで。

一路:だから、今度は松尾スズキを中心にして『悪人』を撮ったら良いかもね。そして、意外に彼にもいろいろあるのかもよ。鳩山:出てる人がみんな良かったよね。柄本明とか、樹木希林とか。

一路:樹木希林すごかった。鳩山:いる、あんなおばあちゃんって。

一路:私この前思ってたんだけど、おばあちゃん役はうまいって分かったからさ、今度

は熟女でモテる妖艶な役をやったら面白そう。どんな演技見せるのかなって思ってる。あのおばあちゃんて妖艶な演技まででき

たらすごいよ。

鳩山:妖艶とか想像つかないもんね。見てみたいかも。

一路:この前友達と、最後の妻夫木くんが深津絵里の首を絞めるシーンで、あれをどう捉えるかって話をしたのね。私は深津絵里を思っただけで話をしたのね。私は深津絵

里を思っただけで、小説しか読んでない友達が、小説ではそこは曖昧に描かれてるから映画

でははっきり描かれてたんだねって言ったんだけど、映画でも曖昧だったよね。鳩山:映画でも曖昧だったよ。そこまではちゃんと描かれてなかった。ただ何かイラツとしたのか。殺意がある感じだったよね。

一路:小説では、その中に原因となるエピソードが挟まってるらしいんだよね。その

エピソードなかったよって話したら、その友達も、じゃあより分からなかったんじゃない?って。でも私は、吉田修一が脚本を書いているからこそ、そのエピソードを削

ってより分からなくしたんじゃないかって思うんだよね。鳩山:深津もどう思ってるか曖昧だよな。

あの人は悪人なんですよ、みたいな。結局あの人が悪人なのかどうか分からないまま終わるところが良いと思う。

一路…そうね。

鳩山…分からないアンド笑顔みたいな。

一路…(笑)

悪とは何か？

鳩山…結局、あの映画の根底にあるのは、悪って何なのか、悪人とは誰なのかってことだよ。それを考えさせるだけの映画ではある。

一路…そうだね。

鳩山…岡田くんも分かりやすい悪だったよね。チャラチャラ大学生という。

一路…(笑)

鳩山…岡田くんと妻夫木、〇しの三人のあの一夜はそれぞれにとって不幸だったよね。〇しは岡田くんにあんなに無下にされるし。

一路…死んじゃうしね。

鳩山…また、車内の〇しのウザさがよく描かれてるよね。そりゃウザくもなるよねって感じで。

一路…自分の気のない人がすごい恋人ぶってる感じが。

鳩山…女将さんになるとか言っちゃうみたいな(笑)

一路…だけど、蹴らなくてもいいよね。あれ、すごいよね。

鳩山…降りるとか言われて。岡田くんは、自覚のない辺り、たちの悪い悪って感じだったね。

鳩山…〇しも、見ようによっては悪だし、見ようによっては被害者でもある。本当どの人も断言できない。松尾スズキ以外は(笑)

一路…(笑) どの人も、誰かに対して悪いことしてるもんね。

鳩山…〇しもひどいしね、妻夫木くんに対して。

一路…そうそう、待ち合わせしてたのに勝手に他の男の人の車に乗って行っちゃっ

たりして。

鳩山…こうなったのはお前のせいだとか言ってる。

一路…あんなに言わなくてもいいのにね。普通に帰って帰ってもらえばいいのに。物語をつぶすような発言だけ(笑)

鳩山…確かに、〇しの立場に立ってみれば、あんなふうには後ろからつけて来られててキモいと思っても仕方ない。

一路…確かに尾行されてたもんね。

鳩山…かわいそうな被害者ってなるわけではなくて、出会い系やってみましたな感じで醜聞が広まってさ。

一路…でも、わりと〇しも「孤独だった」みたいに報道されてたけどね。

鳩山…親戚の人たちが集まったときに、売春婦まがいのことやってみたくに言われたし。

一路…あーあったね。

鳩山…妻夫木くんもお母さんにとってはお金せびる息子みたいな話もあったし。単純に良い人なのか、環境に巻き込まれて殺人を犯したのか、はっきりしない部分がある

よ。

一路：岡田くんにしても、一見勝ち組の典型のような役柄だけど、私としては、岡田くんは最後にまた笑ってて、この人はこうやって笑って生きていくんだなって感じに見えた。だけど、それがまた孤独な人だになっていく風にも見えた。大切な人はいるかってO.Lのお父さんは聞いてたけど、岡田くんは寂しい人っていう感じがして。大切な人を作っていけるのかなどか思った。ただ、岡田くんみたいな人、たくさんいるよなとも思うけど。意外にちゃんと恋愛して、「彼女だけが大切」みたいな振る舞いもできる、みたいな。世渡り上手っていうか。

鳩山：それに比べ、光代の優しさは半端なかった。そんな光代と出会って良かったけど、自首しようとしたのを止めたのも光代だからね。罪を増すようなことをしたのも光代だもんね。光代にも罪は絶対にあるよ。具体的に刑罰で科せられるような。でもそれも結局、あの紳士服売場でまた働けてるってことは、連れまわされたっていう形で

収まったってことだよな。

### 行為としての「悪」、精神としての「悪」

鳩山：それなりにみんなベタな感じの設定というか。分かりやすく、それなりの辛さを抱えてる。悪とは何かってことを描こうとしたときに、行為としての悪と、精神としての悪が対比されるのかなって感じがして、精神としての悪が岡田くん、行為としての悪が妻夫木くん。精神としての悪がどれだけあっても、現実には行為としての悪が裁かれる。罪を犯したってことは、シンプルにこの人が悪かったっていう。

一路：行為としての悪が、精神としての悪を上回るのさ、行為としての悪は精神としての悪を制御できない結果発生するっていうのが根本にあるからじゃないの。東野圭吾の「殺意取扱説明書」っていう作品があるんだけど、主人公が殺意のマニユアルを見つけてるっていう話で、気持ちをどう

コントロールしながら最後まで殺人をやっていくかみたいなことが描かれてるんだけど。それを今思い出して、結局、岡田くんではなくて妻夫木くんが殺意をコントロールできなくて殺人を犯してしまうわけだから、妻夫木くんのあの衝動がもう少しコントロールできてたら殺人は起こらなかったのと思う。私の友達は、妻夫木くんの正義感だったんじゃないかって言ってたけど。O.Lが「乱暴されたって言いつらしてやる！」とか言ってたときに、自分は正しいっていう気持ちから怒りがきてるって。あの気持ちが制御できたら、殺人は起こらなかつたし、深津絵里ともうまくいったかもしれない。まあそうしたら物語にならないんだけど（笑）結局、悪って何かって言ったら、行為として現れることだよな？ まあ、殺人犯しちゃったから。

鳩山：大前提において、殺人を犯したってことは裁かれることだよな。

一路：岡田くんも蹴ってるから行為には出てるよな。



鳩山：だけど、裁かれるほどではなかった。複雑に悪が絡んで、特定できないよね。この人のこれが一番みたいなのは、この人のこれをしなければというポイントがたっくんありすぎて、でも決定的に裁かれるのは、妻夫木。そう思うと、やっぱり罪が重いのは、行為としての悪だって言えるかもね。もちろん、その人の精神性がその人の行為に影響を及ぼすわけで、その人の精神性ってものもかなりの重要ではあるけどね。

### 行為の「型」で伝える人格性

鳩山：光代は結局、祐一のことを最後までどう思ってたのかな？ あの人は悪人なんですよねってつぶやいて終わるけど。一路：光代には祐一を信じていてほしいけど。そうじゃないと寂しいし。鳩山：でも、ただ首を絞める行為だけを見たら、どういう気持ちで首を絞めたかなん

て誰も分らないから。心根がどうかって言うのを他人が判断するのは相当難しい。逆に言うと、小説だったらどういう心理をたどってきて首を絞めるに至ったのか表現することもできるけど、現実には絶対無理。こうだったって本人が言っても、裁判にでもならない限り、誰にも分からない。一路：だからこそ、人を裁くっていうのが相当大変なんだよね。

鳩山：最近すごく精神には意味がないっていうことを感じるんだけど、どんな気持ちでいようと行為として表現されなかったら無いのと一緒なんだからっていうのいろいろんな場面で実感する。自分のことを心配してくれてるけど何もしない人と、何も思っていないけど助けてくれる人がいたら、助けてくれる人の方がいいわけで。だからこそ、人間って行動の型とかがあるのかなって思う。変な例えだけど、飲み会で、グラスの空いた人にビールを注ぐとかさ、それってみんな何も考えてなくて型通りに行動してるだけだけど、気遣ってるって見えるじゃん。そういうのって行為にまで落

としこまない、伝わらないから。精神を大切にするよりは、行為を行う方が大切。良いとされる行為をきちんと行うことが重要。逆に言えば、悪いとされる行為を行えば、精神がどうかって問題ではなくて、それは悪。精神を判断しようがないから、行為の型ができていく。

一路：そうなんだけど、でもそれって寂しいよね。心の動きを知りたい。でも、表現されないと見えないっていうのもよく分かるよ。

鳩山：全く表現されなかったら、それは無いのと一緒だもんね。……同じこと言っただけだけ。

一路：(笑) だけどさ、なかなか表に出せないこともあるから、そうしたちよっとした動きを読み取ってくれる人がいたらいいよね。辛い時とかも、辛いてなかなか言いにくくて不機嫌な人みたいになつてるときに、あの人も普通なのに、今日不機嫌だから何かあったんじゃないかって思ってくれる人がいると、辛いよっていうのが言いやすくなるのかな。それも実は、

その人の型で聞いているのかもしれないけど(笑)まあ結局は、コミュニケーションってパターンとパターンの関係性よね。

鳩山…心では嫌ってて笑顔の人と、心は好きだけど無表情の人がいたら、人間笑顔の人を選ぶと思う。それは証明しようがないよね。

一路…そうね。「悪人」の小説では、祐一が苦しめる人に何かする快樂殺人みたいな性癖があるっていうことになって、だから深津絵里を連れまわしたのも、怖がる彼女を無理やり連れまわすっていう性癖から来てるってことになってたみたい。しかも、捕まった後もそういう性癖があるって自分でつらつらと語るんだって。

鳩山…どんだん精神は見えなくなるね。自分がそういうことを言ってしまうと、それが事実になる。いかに人間の精神が見えにくいのかっていうのが描かれてるよね。

一路…見えにくいのは確かに見えにくいけど、本人も分かかってないこと多いじゃん。自分自身も本当にこうしなくてしてるのかも分からないっていうこともあるから。

鳩山…人間っていう謎は深いよね。自分分らないし、他人も分らない。

一路…だからこそ、表に出る行為だけで何とかやって行かないと、本当に精神まで探って行こうとしても、本当のことは誰も分からないよね。

鳩山…だからこそ、型っていうのがどんな重要度を増すよね。社会における型っていうものが。

一路…型は重要だけど、そこでどう自身身を表示するかなんだよね。まああるかどうかも分からない自分自身ではあるけど(笑)つまり、一瞬一瞬だよ。今の自分はこう表現したいっていう気持ち。

鳩山…日常生活を送っていると、日々の現実を追われて自分を表現するっていう行為は置き去りにされるって思ってるけど、だれか一方でそういう日常生活を送ることそのものが、自己表現なんだって感じることも多々あって。そういう状況のなかで、この人は自分にこうしてくれたとか、自分はどうしたとか、日常生活の積み重ねで、この人はこういう人だとかいくつものエ

ピソードがその人を作っていくから、日常生活の積み重ねが重要なんだよ。

一路…本来は、出そう出そうとしなくても、勝手に出るからね。それをいろんな人が見た結果、その人が形作られていく。自分探しが流行ったときに、探しても探しても自分は無いから、人と関わることが重要で、関わったことで自分が出てくるって結論付けられてた。

鳩山…でもやっぱり、それだけがすべてじゃないって部分もあるよね。本当の自分があるかどうかは分からないけど、でも周りの人に分かれてないって思うこと。日常生活をただ送ってるだけじゃない関係っていうか。

### 自分の中の規範が「悪」を作る

一路…自分がどこを積極的に出していかかっていうのは戦法としてあるよね。こういう風に思われたいなら、そこを積極的に

出していったって、そうじゃない部分を隠すとか。

鳩山…キャラ設定ってやつだね(笑)前に見てた韓流ドラマで、主人公以外の周りの人全員に良い人と思われてる登場人物が出てきて、そこまでみんなに良い人って思われるなら、もうこの人は良い人なんじゃないかって私は思ってたんだよね。むしろ自分だけが自分のことを悪人だと思っててる。思ってるから、悪人が自分だってことになってるけど、自分も良い人だと思ってれば、もはや完璧に良い人だよ。逆に道徳感が働いて、自分のことを良い人だと思って思えないから。良い人じゃなくなってるけど、いつそ道徳感の薄い人の方がもっと簡単に良い人になれる。

一路…ほんとそうだよ。私もよく悩んだ時とか、問題となってることって、だいた問題だっという規範があるから問題化されてるんであって、自分が自分の規範の中では問題でないって思えれば悩みは基本的に解決するんだよね。

鳩山…それは悩みじゃないって思えればね。

世の中の多くのことはそうだよ。

一路…目が細いとかで悩んでる人がいたら規範が目が大きくてまっ毛長い人を良しとするからダメに思えるんであって、それが規範じゃない世界もあるって思えれば、問題じゃなくなる。

鳩山…正義感が強いからこそ、逆に罪を犯してしまふ、悪人になっていってしまうというパターンも往々にしてある。自分の中の規範こそが罪を作る。その人の善と悪みたいなものとか、他人と共有できないこともあるし。こんな曖昧な世界でよくやっていけるよね。

一路…ほんとだよ。よくやっていけるよね、人間。コミュニケーションがいかに難しいか。

鳩山…よくやれてるよね。やれてないのかな？

一路…だからこそ面白いんだよ。複雑だから、うまくやれてないからこそ面白いんじゃない。やれてばかりだとつまんないよ。あんな、『悪人』のような、複雑な人間関係の中で。

鳩山…みんな揺れ動きながら、さも何事も無いかのように。

一路…よく分らない自分とよく分らない他人と、よくコミュニケーションを取ってられる。

鳩山…人間に乾杯ということ。

一路…(笑)

鳩山…ザ・エンドということ。終わらせなかった(笑)



# オタク女性が恋愛において とりがちな行動！！

徹底検証！

恋愛において経験値が低くウブな（しかし少女マンガやテレビドラマから多くの影響を受けている）オタク女性（女子とは自称しません。なぜなら先達で電車で向かいに座った30前後と思われる女性が「ウチラ〇〇女子はー」とか言ってるのを見て、うをう・痛い・私は決して自分のことを女子と自称すまい、と固く心に誓ったのです）恋愛感情を抱いた際に、その感情の収めどころがわからず、時として怪しげな行動をとってしまいがちです。今回はその一例について例を挙げてわかりやすくご説明致します。（記者：マチコ＝メスシリンダー）

例) 初対面の男性に「ドキッ・ちょっといいカモ・」なんて思ったとき。



..てな会話があったとして。その日の夜のオタク女子の行動↓



注：これは私の友人の話をもとに書きました。え、いや、私じゃないですよ？ハハハ...やだなァ



# パイヌとイヌ

連載第3回

いちろ まみ

あらすじ

ぺんちゃんは、商科大学から日本のある大学に留学中。この物語は、ぺんちゃんと相棒のイヌが織りなす不思議なお話。

## 第5話 イヌのブタ疑惑

ある日、ぺんちゃんは気づいてしまいました。

「わっふふふふ、フゴッ、わふふふふふ」

イヌは大笑いすると、時にブタ鼻になるのです。

学生でこった返しているお昼の学生食堂で、ぺんちゃんは食後のおしゃべりを楽しんでいました。みんなが席を立ち始めたとき、ぺんちゃんは怪しまれないように背後からイヌに近づきました。ひれをくちばしに当ててひそひそ声でささやきます。

「……イヌはブタべき？」

するとイヌが答えました。

「イヌは日本語よく分からんわふ」

イヌは都合が悪くなると、すぐこんなふうに言っておまかせます。ますます、ぺんちゃんの謎は深まるばかり。イヌは見た目は犬でも、中身はブタなのではないか……。

ある夜、イヌがぺんちゃんのアパートを訪ねてきました。ドンドンドン。

ドアの向こうでは、イヌがぼろぼろと涙を流して立っていました。

「キューン、ぺんちゃん……、ぐすっ」

驚いたぺんちゃんは慌ててイヌを部屋に入れてあげました。イヌは部屋に入ったとたん、泣きながらぺんちゃんに飛びついてきました。目からは相変わらず大粒の涙がこぼれ続けています。ぺんちゃんはひれでイヌの頭をよしよしなでながら言いました。

「何で泣いてるべい？」

イヌが答えました。

「ぐすん、5限で隣に座った人に筆箱とられたわふ……」

そう答えると、イヌはまたぺんちゃんのふわふわした胸に頭をうずめます。

隣の人とイヌの持っていた筆箱が良く似ていたので、隣の人には自分の筆箱をかばんにしまったことを忘れて、イヌの筆箱まで持って行ってしまったようです。

「気づかなかったべい？」

「寝てて、授業が終わったことも分からなかったわふ」

泣いていたイヌは、ぺんちゃんのみぎの上に丸くなっていつの間にか眠ってしまいました。

「風邪ひくべき」

ぺんちゃんはイヌを起こして、ベッドに連れて行きました。ベッドに入ったイヌはふとんをかけられると、すぐにグーグーといびきをかき始めました。

「よっほど眠かったべきね。明日になったら忘れてるべい」すると、グーグーと一定のリズムで鳴っていたいびきが突然止まりました。シーンとした部屋の中、ぺんちゃんがベッドを見ようとしたそのときです。

「フゴッ」

またイヌの鼻がブタになりました。ぺんちゃんは目をかっ

と開き、イヌを見つめました。グーグーと一定のリズムでいびきが始まりました。

「……やっぱり、ブタがイヌのふりをしているべき」ぺんちゃんはそれ以来ずっと、イヌのことをブタだと思っ

ています。しかし、イヌが言ってくるまで、ずっと待つつもりでいるようです。



(絵 舟丸クルミ)



## 第6話 子猫を拾う

ペンギンのぺんちゃん、大学からアパートに帰っていました。

ぺたぺたぺたぺた。今日の夕ご飯はなに作ろう。ぺたぺたぺたぺた。

公園から、突然、慌てた様子で女の人が出てきました。何度か振り返りながら歩き、肩にかかったかばんを直してまた振り返り、駆けるように小走りです。ぺんちゃんはもしかして公園に変質者が出たのではない、早歩きで通り過ぎようと思いました。公園をちらりと見ると、大きな白い猫が歩いてきました。まるで、去っていった女の人の後を追うようです。

「なんだ、猫べき」

ほっとした様子で、ぺんちゃんはアパートに戻りました。ぺんちゃんがドアにひれをかけたとき、後ろでミヤアと鳴く声がありました。振り返るとそこには、小さな赤ちゃん猫が首をかしげて座っていたのです。

「どこから来たべい？」

ぺんちゃんはしゃがんで、子猫の目線に合わせました。大きな瞳で見つめながら、子猫はミヤアと鳴くばかり。そのとき、キュルルルルと音がしました。お腹の鳴る音です。ぺんちゃんでした。

「お腹すいたべき。寄っていくべい？」

ぺんちゃんは部屋の中に子猫を入れてあげました。ぺんちゃんが雨戸を閉めようと、部屋の窓を開けると、子猫はカーペットの上でごろんと寝ころがり背中をなすりつけ始めました。

「あつ、こら！ 毛がつくべき！」

ぺんちゃんは思わず、子猫のおしりをひれで叩いてしまいました。子猫がサツとぺんちゃんの顔を見上げました。瞳がだんだんとうるみ始めます。

「べきい、ごめんべい。わざとじゃないべい」

ぺんちゃんは慌てて、子猫を股の間に挟もうとしました。ペンギンはこうして子どもを温めるのです。踏まれる、思った子猫は猛然と窓の方へ駆け出しました。

「あつ、待て！」

窓から飛び出した子猫は、ちゃんと庭に着地して今にも駆け出そうという様子。ぺんちゃんは玄関から回って、子猫の背中を追いかけ始めました。

ぱつと子猫が入った路地をぺんちゃんもついていきます。塀の間の暗い隙間を、どんどん追っていきました。水のない溝の間を走る子猫を上からのぞきながら、ぺんちゃんは溝の隣をよこ歩きで進んでいきます。溝から出た子猫が右に曲がると、ぺんちゃんも右、左に曲がれば、左。すると突然、中央に大きな木があるだけの、何も無い広い原っぱに出了ました。

木の根元に、公園で見かけた大きな白い猫がいました。追

つてきた子猫がその猫の後ろでちょこんと座っています。ペンちゃんが近づいていくと、白い猫が言いました。

「あんた、うちの子に何したの」

白い猫は目を三角にして、キラキラとにらみつけてきます。そしてときどき、フーツという声を出します。

「いや、何……」

ペンちゃんの言葉をさえぎるように、白い猫が叫びました。

「焼き鳥にして食うぞ、このヤロウ！」

ペひいっ、と悲鳴を上げてペンちゃんは来た道を走って逃げようしました。つかまったらあの鋭い爪で押さえつけられ、ペろりと食べられてしまいます。ちょうどそのときでした。

「ペンちゃん、何してるわふ〜？」

しっぽを振りながら、イヌが原っぱの向こうから走ってきました。

「イヌ！」

すると、イヌの姿を見た瞬間、猫が毛を逆立てて戦闘体制に入りました。

フーツ！ フーツ！ 爪を立てて、子猫を守ろうとしているようでした。ペンちゃんは近づいてきたイヌに言いました。

「イヌ、逃げるよ」

「わふ？」

ペンちゃんはイヌの背中に飛び乗ると、イヌのおしりを競馬のジョッキーのように叩きました。

するとイヌはべたんとお座りしてしまいました。

「ちがうちがう！ 走るべき！」

「わふ？」

よく分からないまま、イヌは走り出しました。ペンちゃんが通常走るよりも何倍も速く駆けていきます。

ビュン、ビュン。ビュン、ビュン。ズボツ。ベチャツ。

ビュン、ビュン。

細い道では、イヌの大きな体はときどき足をすべらせて溝にはまってしまいます。

通りになると、ペンギンに乗せた犬が走っていくので、すれ違う人々みんなが振り返っていました。

そうこうしながら、ようやく2匹はペンちゃんの家の前までたどり着きました。

「ありがとうべい。イヌのおかげで焼かれずにすんだべき。ところで、イヌはあそこで何してたべひ？」

するとイヌが答えました。

「家に帰る途中に、道に落ちてたソーセージのかけらを食べたら、そのちよつと前にまたかけらがあって、そのまた前にもかけらがあって……。うーん、よく分からんけど、あそこにいたわふ」

2匹のお腹が同時にキュルルルと鳴りました。

「ご飯、食べていくべひ？」

「わふ！」



# VIVATAKE777

## の お悩み 相談室

VIVATAKE777 (29)

平成20年1月～平成22年1月までの2年間、青年海外協力隊に参加し、  
バングラデシュにて水泳の指導にあたる。  
山口県在住。



### Question:

ダイエットをするのに下半身の筋肉を鍛えるのは有効ですか？

### Answer:

そもそも、脂肪が燃える仕組みから説明しないとイケません。例えるなら、筋肉は工場です。大きいほど、作業の効率があがります。筋肉肥大は、さらに基礎代謝（分かりやすく言うと「何もしないで脂肪が燃焼する量」という意味です。）を高めま。さて、質問に戻ります。下半身は上半身に比べ筋肉量が3倍あると言われます。筋肉の総量を増やすには下半身を鍛えるのは効率的と言えます。ただやり過ぎては、伊藤ミドリばりの太いふとももになってしまう恐れがあります。

結論→なにごとにもバランスが大事。

### Question:

マニキュアの終わりが分かりません。

### Answer:

マニキュア。ああ、あの爪に塗るやつですね。終わりがわからない？終わりと思った時が終わりです。

結論→あきらめたら試合終了ですよ。

## Question:

有効な婚活方法を教えてください。

## Answer:

婚活、それは即ち人生そのものです。いい男、いい女になれば自ずと相手が見えます。ただ、それは一朝一夕でできる事ではありません。そこで手軽にやれるコンカツを紹介しましょう。基本的にいい男、いい女はコンカツしません。コンカツをすると決めた時点で自分を諦めましょう。ご心配なく、あなたの魅力に気づく人は必ずいます。ただ日本にはいないだけです。即効バンクラに行きましょう。一定条件を満たせばだれでもモテモテです。結婚するだけならほぼ100パーできるでしょう。ちなみにモテモテ条件は一つ、デブであること。二つ、黒髪ロン毛。最後にメガネは外しましょう。

## Question:

お酒がやめられません。あとやせたい。

## Answer:

私は禁酒がやめられません、酒を飲むより楽しい事がたくさんあるためです。酒は肝臓に負担をかけ、筋肉の材料であるたんぱく質の分解、吸収を鈍らせます。つまり回復力を減少させるものと思われます。ただ一流のアスリートでも酒を飲んでる人は多くいるため、飲みたい気持ちを抑えすぎるよりは、適度に飲むことがベターな気がします。ダイエットの原則は『楽しく』です。お酒を自分へのご褒美と位置付けるのもいいでしょう。効率的にトレーニングをすれば酒をのんでも痩せます。引き締まった自分を見ることが楽しくなります。そうするとさらに練習効率を高める為、禁酒にたどりつきます。

**結論→まずは運動。それでもダメなら押尾学に気をつけつつ、麻薬をやってください。もっと楽しくなるし、同時にやせる可能性があります。**



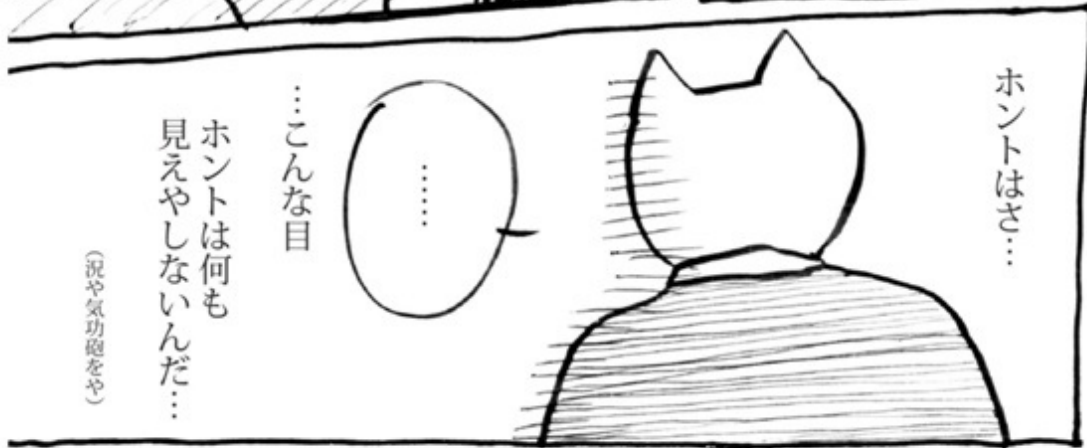








※このようにちゅーとかで  
くまかす男はいけません



(泥や気功廻をや)



※ドフじゃなくてみぞ!

Fin 大学的な 締め方ヤ3?

※みぞにおちた



まともなアナタに贈る、あたしのまともな日常

一路真実

1

カチツカチツ。  
未読メールをすべて削除します。  
はい。  
カチツ。

「須藤さん。休憩入っていいわよ」  
「はい」  
あたしは席を立つとすぐ、廊下へ飛び出した。ヒールの音を鳴らして、早足でトイレに駆け込む。  
一番奥の個室。あたしの、居場所。

新卒で入社したあたしに待っていたのは、素敵な上司でもかっこいい先輩でもなく、大量のスパムメールだった。システムの知識の全くないあたしが、情報環境部に配属になって、ただ毎日パソコンの画面を覗き込んでいた時、さえない頭の禿げた上司が言った。  
「須藤さん。プログラミングもできないの？」  
だって、あたしは文系なのよ。この会社だって、食品の販売会社じゃないの。あたしは缶詰を

抱えて、海外を飛び回る営業職を希望してたんですけど。

「私の長所はバイタリティのあるところです。学生時代にアルバイトで参加した御社の缶詰販売も、私の売上成績が一番でした。国内だけでなく、海外でもこの能力は活かせると思います」  
成績が一番だったというのはウソだし、英語なんて全く話せないけど。でも、やる気だけはあった。海外のバイヤーと値段交渉して、一日で三つの国を股にかけるような多忙な日々を送る予定だったのに。

「須藤さんにぴったりの仕事があるんだよね」

そう言って、ヤニに黄ばんだ歯を見せた上司があたしに与えた仕事。

それが、スパムメールの削除だった。

スパムメールと言えども、すぐに全部削除できるわけではない。中に重要なメールが紛れているからだ。業務に関係のあるメールかどうかを主にタイトルで判断する。中身をいちいち確認していると一向に進まない。必要なものとそうでないもの。それをふるいにかけていく。

あたしの部署には一日に数千通というメールが届く。ちなみにその七割がスパムメール。出会い系の勧誘ばかり。

最初はスパムと思った瞬間に削除していた。慣れてくると、徐々にその意味を考える。

「無料で簡単登録！」

「タダほど高いものはない、か」

削除しても削除しても、どんどん送られてくるメール。販売のシステムを作る前に、このスパムメールを排除するシステムを作れよ、と毒づく。しかし、能力のないあたしは何もできない。

「あなたを待っている人妻がいます」

「人妻でも何でもいいや。あたしを待っている人がいるんだったら」

カチカチとマウスのボタンを叩きつける。強く押してもたくさん消えるわけではない。分かっているけど、またやってしまう。

「世界の巨乳美女と出会えます」

「いいね。出会いたいよ。巨乳美女」

頭の中にもやがかかったようにぼんやりする。思考能力の低下だ。目の前がだんだんかすむ。パソコンの画面を見すぎているせいか、もしくはこのタイトルのせいなのか。

「穴が開いていました」

「穴ね。穴」

削除ボタンを押そうとして、はっと気付いた。メールを開くと、缶詰に穴が開いていたという苦情だった。あぶない。後ろ頭をかきむしる。セットされていないぼさぼさの頭がさらに乱れる。スパム以外の残り三割のメールを見落としては、仕事をしていないのと同じだ。三割の原石を拾うために、あたしはここに座っているのだから。

突然、後ろでバリッと音がした。振り返ると、三十代後半、スッピンで会社に来ている田辺さんが、スナック菓子の袋を開けていた。黒ぶちの眼鏡の奥で、あたしをちらと一瞥すると、ぼりぼりとむさぼり食いながらパソコンの画面に戻っていった。彼女の鼻先にある訳の分からない記号で埋め尽くされた画面に、あたしはうんざりした。

全くもってこの係は良い人がいない。不潔な上司、さえない独身女性、額が汗ばんでいるオタクの男、時代錯誤な風貌のやせ細った男。そして、スパムメールと会話するあたし。隣の係も似たようなものだ。憧れのOL生活とは程遠い。おしやれをする必要もないのだ。

あたしは二時間置きに席を立つ。それも規則的に。相棒は悲しそうにあたしを見つめる。

「思わず触りたくなるお尻☆」

「そうね。ありがとう」

そして、トイレの一番奥に入る。便座に腰掛け、頭を抱える。

あたしは何をやっているんだろう？

何のためにここにいるんだろう？

その姿勢で数十分したら、ようやくあたしが戻ってくる。だって、これでお金がもらえるんだっていいじゃないの。へらへらして、何も考えずにひたすら余分なものを削除するだけ。それがあたしの仕事なの。

やっとの思いで立ち上がり、水を流した。

昼間はスパムと会話しているあたしは、夜になってもまともな人間との会話は無い。これが彼氏のいない、一人暮らしの悲しい女性の生活。

あたしは自宅に帰るとすぐ、ストッキングを脱ぎながらパソコンのスイッチを入れた。一日に何時間パソコンの前にいるんだろう、という疑問は最初の数か月で蓋をした。だって仕方がないもの。このままだとテレビに向かって会話して、最終的には独り言で怒鳴り合いができるようになってしまう。

メールボックスを開く。そこにも排除できないスパムメール。

「入れたくなるアナル」

そっか。韻を踏んでるわけか。

家に帰っても相変わらず、スパムメールと会話だ。次のメールのタイトルを見た。

「チャットで素敵な恋人を見つけませんか」

思わず、削除の手が止まる。そして、あたしはメールを開いた。

それからだ。毎日帰ると、あたしはすぐにパソコンの電源を入れ、ツーショットチャットを始めるようになった。二人がチャット部屋に入ると、自動的に他の人が見られない仕組みになる。嫌になったら相手を閉め出すことができる。女性が一人で待機すると、次から次へと男性が入ってくる。

「いくら？」

「どういう意味？」

あたしはよく分からず、そう打ち返した。

「円ってこと」

会話の内容からすると、どうも隠語らしい。援助交際かと推測して、あたしは相手を閉め出した。下手な鉄砲は数撃っても当たらない。男性がひっきりなしに出入りするからと言って、すぐに恋人が見つかるはずもなく、この手の奴ばかりが通り過ぎる。最初はまともかなと思える奴も、最終的には

「エッチな会話もオツケーですか？」

ということになる。

そんな奴と刹那的な会話を繰り返し、気付けば二時間経っていた。もうそろそろ止めようとしたとき、彼はやってきた。

「こんばんは」

これで最後にしよう決めて、あたしはタイプした。

「エッチな会話はできないよ」

更新ボタンを押すと、文字がぱっと浮かび上がった。

「寝る前に普通の会話がしたいだけ」

あたしはちょっとにやける。そして、できるだけ早く返事を打つ。しかし、あたしのタイプは

追いつかなかった。書き終わる前に、彼の言葉が浮かびあがる。

「今日は仕事だったの？」

それから、彼はあたしの仕事の愚痴を聞いてくれる存在になった。

職場にいる訳の分からない男性以外とまともに会話したのはいつ以来だろう。彼はいつもあたしの心を支えてくれる。

「仕事がつらいよ」

誰かに聞いてもらえるだけでよかった。世界のどこかで、あたしを癒してくれる人が存在している。それだけでよかった。

「お疲れ様。ミカはよく頑張ってるよ」

あたしの本名は玲子。ミカはハンドルネームだ。仕事なんてみんな辛いんだよ、なんて言わないところが好き。

「ミカが近くにいたら、頭なでてあげるのに」

あたしは悶絶しながら、片手に持っていたビールをぐいと飲み干した。最近彼は純粹にあたしに会いたがっている。あたしも彼に会ってみたいと思う気持ちと現実を知る怖さが次のタイプを押しとどめる。何てレスを返そうと考えているうちに、彼が浮かびあがる。

「ごめん、ひいたかな？」

あたしはすぐに返事をした。

「全然。あたしもケイに会いたいよ」

カチッ。

「須藤さん」

カチッ。

「須藤さん」

カチッ。

「須藤さん」

あたしは肩を触られて、はっとした。

「あ、田辺さん。呼びました？」

背後に立っていた田辺さんの眼鏡がきらりと反射した。無造作に切られたショートヘアとやけに長めのスカートが、何とも言えない気持ちにさせる。でも、この人仕事できるんだよなあとギザギザの前髪を見ながら思った。

「さっきから何度も呼んでるよ。三宅さんが手伝ってほしいって」

狭い分室は書類が散乱しており、ほこりをかぶった本が無造作に積み上げられている。その真ん中で、砂漠に突然生えた雑草のように、ひよろひよろと三宅さんが立っていた。

「過去の書類で必要なものがあるんだけど、たぶんこの部屋のどこかに埋もれてるんだ」

三宅さんは、ほこりに消されそうな細かい声で概要を説明すると、さっそく足の踏み場のない書類の山をかき分け始めた。あたしもそれに倣って、本に手をかける。

書類が飛ぶという理由で窓も開けられず、ほこりの息苦しさに耐えながら彼の書類を探す。

「須藤さん。入社して半年くらい経つけど、仕事慣れた？」

「……はあ、まあ」

あたしは曖昧に返事をしながら、いらぬ書類を端に積み上げる。スパムメールの削除に慣れるも何もあるもんかと内心とげが突き出したが、あたしに仕事のことを聞いてくれるだけましかと思ひ、心をなだめた。

「大変な仕事だけど、重要だから。須藤さんのやってることは」

あたしは驚いて、彼の顔を見た。入社五年目の三宅さんは、係の中でもあたしと一番歳が近い。あたしの仕事での様子を他の誰よりも心配してくれていたのかもしれない。いつもうつむき加減の彼は、書類を探すためにさらにうつむいていて顔など全く見えなかったが、あたしは想像力でそれをカバーした。時代遅れのアイビーカットの坊ちゃん刈りも、良家の御曹司のようなさらさらヘアに見えなくもないし、顔の半分もありそうな角ばった瓶底眼鏡も、流行りの眼鏡のその先へ突き抜けているのだと思えなくもない。つまり、あたしは少しだけ彼にときめいたのだ。

その時だった。目の端で書類をかき分けるように黒い物体がカサカサと動いて行った。

「うわっ」

あたしは思わず、彼の背中に飛びついた。すると、彼はあたしを守るような格好で、その場にあった分厚い訳の分からない記号で埋め尽くされた本を取り上げ、黒い物体を何度か叩いた。

あたしはまた、想像した。あたしの手のひらの先にある彼の背中は、あまりにやせ細っていて

骨骨しいけれど、いざというときは微力ながらあたしを全力で守ってくれるのだ、と。この手の向こう側にある、薄っぺらい肉の内部に秘められた熱を感じたくて仕方なかった。

分室での一件があってから、あたしは何となく三宅さんを目で追うようになった。髪もかわいいゴムで束ねて出勤し、何か仕事上で三宅さんと接点がないか探すようにさえなっていた。

だけど、二時間置きにトイレへ駆け込む習慣はなくならなかった。朝の出勤時に挨拶をしたきり、帰るときまで誰とも会話しない日が続く。パソコンの前に座っているあたしに誰か気づいているのだろうかと思わずにはいられない。丸い卵を何度クリックしても、どんなに強く叩き続けても、殻にはひびすら入らない。トイレの狭い空間だけが、唯一自由になれる場所であることに変わりはない。

「じゃあ、駅前の銅像の下で待ってる。ボーダーのポロシャツを着ていくよ」

あたしは待ち合わせ時間より早く着き、銅像が見える喫茶店でコーヒーを飲んでいた。バーチャルなあたしの心の支えとついに会うことになったのだ。緊張で吐きそうになる気持ちを抑えながら、あたしはボーダーを探す。

待ち合わせ時間を十五分ほど過ぎ、あたしはついに痺れを切らして銅像の下へ行くことにした。カウンターを通り過ぎる時、あたしをしきりに見つめている人がいた。

「ミカちゃん？」

体を横断するように、青く太いラインが入ったポロシャツを着ている。ケイだった。

あたしはネオンの街をうきうきしながら歩いていた。だって、あたしたちは考えも行動も同じじゃないの。喫茶店で待ち伏せして、こっそり銅像を見ているなんて。こんな近くにいる、同じ距離を同じ時間眺めているなんて、これは運命なのではないかと思っていた。

あたしたちは、そのまま喫茶店で話をした。ケイは年齢があたしより二十近く離れていたが、見た目は若かった。というか、派手に若作りだった。焼けた肌と茶髪、ゴールドのアクセサリが顔の皺とアンバランスだ。でも、そんなことはどうでもよかった。あたしは、彼のごつごつした手ばかりが気になり、盛り上がった指の関節がしなやかに動く様子を眺めていた。あの指は今までどんなふうにも人に触れてきたのだろうかと思い始めたとき、彼が言った。

「そろそろ行こうか」

彼は喫茶店を出ると、細い路地へ歩いて行く。あたしは言った。

「これから、どこに行くの？」

彼は突然、大きな手であたしの手を包み、引っ張るようにして強引に歩き始めた。あたしはその行為にドキドキし過ぎて、気色悪いピンク色の電飾の灯った店がラブホテルだったことに気付かなかった。

何だかもうどうでもよかった。あたしの体はあたしのものであって、でももうあたしのものでなくて、彼のものでもなくて、夜の闇のものなのだ。昼間、物体として存在しているあたしだって、誰のものでもないし、誰にも必要とされていないのだ。だからこそ、少しでも夜のあたしを必要としているのなら、彼が少しでもあたしを求めているのなら、それだけでもういいのではないかと思った。

行為が終わって、ケイは言った。

「チャットの人と会うなんて、やる以外にどんな目的があるの？」

でも、ケイと関係を持ってしまったことに対して、あたしは全く後悔していない。その後、音信不通になって、あたしは心の支えを失ってしまったけれど、あの時、彼があたしの手を掴んで離さなかったことは事実なのだから、もうそれ以上何も必要ないとさえ思えた。

それは言い訳なのかもしれない。物事を正当化しようとする、あたしの屁理屈なのだろう。



深夜二時、あたしは近所の公園のベンチでうずくまっていた。夜の徘徊が止まらない。気付いたときには外に出てから何時間も経っている。歩きまわっていることもあれば、こうしてただ座っていることもある。バーでお酒を飲んでいることもある。

あたしは、夜の闇に浸食されているのだ。

あたしの心臓に針を刺したら、夜の闇がどくどくと流れ出てくるだろう。誰かに承認されたいとか、誰かと一緒にいたいとか、そういうレベルをもうとっくに超えている。心の穴はふさがらないところまで押し広げられてしまい、夜の闇を溢れ返らせる。何かを求めているけれど、何を求めているのか分からずに、衝動をただ垂れ流し続けるのだ。

あたしはチャットで知り合った、ケイ以外の男性たちと会うことを繰り返し、その後も気色悪い電飾の下に何度も立ち続けた。

その日もまた、あたしはどこの誰かも分からないオヤジと会っていた。夜の黒い力に負けまいとして赤々と灯るネオンの街を歩く。太って息苦しそうに笑う四角い顔があたしに近づく。男があたしの肩に手をかけ、引きずり込むようにホテルへ入ろうとした時、目の端で明るい白い影が見えて、あたしは顔を向けた。そこに立っていたのは、三宅さんだった。

三宅さんは、会社帰りに飲んだ様子で赤い顔をしていた。会社では見せないような、あたしの派手な格好に驚いて、黙って見つめ続けていた。厚い瓶底眼鏡の奥の細い垂れ目が、見開かれ、あたしはその目に気付いたときにとっさにオヤジの腕を振り払った。オヤジはよろめいて、再び手をかけようと巨体を揺らして近づき、あたしの腰を引き寄せた。へらへらして黄色い歯を見せ、脂ぎった顔を近づける。

「いやっ」

あたしはオヤジを突き飛ばした。すると、三宅さんがオヤジとあたしの間に立ちふさがり、言った。

「やめろよ」

オヤジは見知らぬやせ細った男が出てきたことに対して、怒り狂って奇声を上げた。三宅さんは、冷静に

「彼女が嫌がってるから、やめてください」

と言った。いつもぼさぼさの髪の毛をしているあたしは、その時やけに力の入ったカールにしている、会社では履かないようなミニスカートにピンヒールという服装だった。メイクもごてごてと塗りたくって汗で部分的にはがれ落ちている。こんなあたしは三宅さんに助けてもらえるような人間ではない。こんな格好のあたしがとてもみっともなく思えて、あたしは三宅さんの背中に隠れて恥ずかしくてたまらなかった。もう顔を合わせられないと思った。できることならば、三宅さんが振り返らずそのまま去ってくれたら、と願った。オヤジが怒鳴った。

「何言ってるんだ。その女が誘って来たんだぞ。タダでやらせてくれるって」

オヤジはそう言うと、周りを気にしながらこちらに何かを叫んで走って行ってしまった。

あたしの願いは聞き入れてもらえなかった。三宅さんはゆっくりとあたしの方を振り返ったのだ。普段と全く違う娼婦のような格好のあたしを下から上へ注意深く目で点検していく。そして、最後にあたしのどろどろに溶けた顔を軽蔑したように見つめた。

「須藤さんが悪いよ。そんな服装でこんな街を歩いてるなんて。僕は君を理解できない」

そして、歩き出そうとして顔だけをこちらに向け、語気を荒げて言った。

「汚いよ」

去っていく彼の背中を見て、あたしは思った。三宅さんに嫌われたのだな、と。

あたしは大きな溝に落ちていくように思えた。三宅さんは、あたしが派手な格好で街を歩いて、変な中年男性にホテルへ連れ込まれそうになったことに対して、言ったのだ。そういうあたしが「汚い」と。

しかし、それ以上にあたしは汚れているのだ。実際にあのオヤジが言ったことは正しい。あた

しはこれまで妙な男と繰り返し寝ていたのだ。あたしは三宅さんが感じる汚さのはるか向こうに存在している。

泣くことも笑うことも何もできずに、あたしはピンヒールで駆け出した。三宅さんが言った汚いという言葉が繰り返し、頭に浮かぶ。しかし、今のあたしはそんなレベルではない。三宅さんの言葉の体系にある「汚い」という形容詞では表わされない。あたしはもう、彼の中には存在できないのだ。

気付いたら、あたしは真っ暗な会社の中にいた。唯一の居場所である、トイレの一番奥に入ろうとしていたのだ。その時、誰もいないだろうと思っていた廊下で声をかけられた。

「須藤さん？」

それは、あたしの後ろの席に座っている田辺さんだった。

「こんな時間にどうしたの。しかも……」

田辺さんはあたしの格好を見ると、ぎょっとした。独身で仕事だけに命をかけている田辺さんは、こんな時間でも真っ暗な会社に一人残って仕事をしていたのだ。あたしは彼女の姿を見ると、ようやく涙が出てきた。溢れ出た涙は止まることを知らないくらいに流れ続け、あたしは廊下に突っ伏した。

車の中は、田辺さんの雰囲気には似つかわしくないほど甘いイチゴの香りが充満していて、あたしは彼女の意外な少女性を感じた。あたしはもう泣いてはいなかった。助手席の窓から暗い道路を眺め、サイドミラーに映る、化粧が落ちて真っ黒な目をしたあたしをぼんやり見ている。田辺さんは何も言わず、夜の森へ入って行った。

車を止めると、外に出るように指示された。車のドアを閉める。ピンヒールの踵が土に少しめり込むのを感じる。「こっち」という声の方を向くと、目の前に広がっていたのは、真っ白なしぶきを上げる滝だった。

「辛いことがあると、この滝を見に来るのよ」

田辺さんは橋の中ほどまで来ると、そう言って欄干を両手で握りしめた。あたしは田辺さんの左側に立ち、滝から時折飛んでくる小さな水しぶきのシャワーを顔に感じていた。田辺さんは言った。

「私にあんたが羨ましいよ」

あたしは田辺さんを見た。化粧つきのない白い肌が透き通っている。

「私にあんたみたいに、はじけたくてもできない。はじけたい願望はあるのに、それをどこにぶつけたらいいかわからないのよ」

あたしは両手でごしごしと顔を擦った。厚く塗った化粧がはげるように。少しでも素顔のあたしに戻れるように。だけど、実際は黒く塗ったマスカラがさらにどろどろと溶けて顔中に広がっただけだ。田辺さんが笑った。

「あんた、顔真っ黒だよ」

そう言って、ハンカチを出してあたしの顔を拭いてくれた。そのハンカチからもイチゴの香りが漂う。

滝壺に白い泡と波しぶきが立つ。ざわめく木々と荒立つ水の音があたしを満たしていく。荒れる滝壺の周りの水面に、夜の空が映っている。世界が中に反転して存在しているようだ。私も流れ続ける滝の一部となって、あの世界へ落ちていきたい。あたしは橋の欄干から身を乗り出した。あたしは言った。

「ここから飛んでもいいですか」

田辺さんは鼻で笑って、それから少し真面目な顔をした。

あたしのことを羨ましいと言った田辺さんは、あたしがここから飛び降りたら一緒に飛ぶだろうか。それとも、橋の上から見下ろして、そういう行動ができるあたしをやっぱり羨ましいと思うのだろうか。もしくは、そんなあたしを馬鹿げていると嗤うだろうか。

あたしのヒールが宙に浮く。できるだけ、足より頭が低くなるように、あたしは欄干に体重をかけ、滝壺へと顔を突き出す。

あたしは言った。

「田辺さん、一緒に暮らしませんか」

滝の水しぶきと木々の匂いのなかに紛れる、イチゴの香りを嗅ぎ取ろうとあたしは鼻を突き出し、意識を集中させる。

あたしは分からなかった。いつどうやったらせわしなく急き立てる衝動が収まっていくのか。裂け続ける心はどうやったら縫合できるのか。滝壺に映る向こう側の世界に、あたしの居場所はあるのだろうか。

田辺さんは体を強張らせて、欄干を握りしめていた。

(了)



惨めだったのか。他人も、自分も不幸  
せなやつだと思っていたのか。そうかも  
知れない。しかし、子供の頃から、ポケ  
ットに星屑をつめていた。いつもこころ細  
い時にはポケットのなかの闇をまさぐっ  
た。明るい絶望というものだってあるの  
さ。真暗なポケットに宇宙があり、希  
望の星はそのうちに太陽系に飛びだ  
す。うつむいて歩きながら、そう考えて  
いた。あの頃、辛さと屈辱を味わったは  
ずなのに、いまは懐かしい。たぶん人  
にとって大切なことはポケットの中の星屑  
なのだ。

浅井慎平 「ポケットに星屑を」

# Philosophy of Stardustbooks

——文化系の趣味を持つ人々をつなぎたい。

「自分と似た趣味を持つ人が世の中に存在しているのだろうか？」

そう思ったとき、手にとった雑誌が教えてくれた。

“あなたは、一人ではない” 自己表現して、セカイとつながる。

スポーツが好き。アウトドア  
が好き。決して嫌いなわけでは  
ないけど、たまにみんなとノリ  
が合わないときがある。

小説が好き。映画が好き。漫  
画が好き。でも、オタクと呼ば  
れる人たちとは少し違う気が  
する。

ひとりで考え込み、ノートに  
書きつけ、誰かと出会いたいと  
試行錯誤を繰り返す。

そんな人たちがつながり、自  
己表現する場をつくりまします。

星屑書房  
STARDUST BOOKS

星屑書房は文化・芸術活動を推進する団体です。

stardustbooks@live.jp <http://stardustbooks/soragoto.net/>





# 編集後記



一路真実

夜から朝になるとき、灯っていた街灯の明かりが一斉に消えます。一瞬混乱しますが、その後「暗い」と感じます。それが朝の始まりです。朝は明るいばかりじゃない。始まりはやはり暗いのです。

烏丸クルミ



ハンコ彫ってます。  
「え、誰だっけ？」と思った方はくまなく探してみてください。  
ヒントは飛べない鳥です。



詠人不知

ずらし飛び見よ。

VIVATAKE  
777



高田順次と松岡修造にあこがれる29歳、バングラデシュにて2年間水泳指導にあたるが熱さは全く伝わらず・・・。



鳩山豆子

後悔しないように生きたいとよく思いますが、それがすごく簡単なことに思えるときと、とても難しいことに思えるときがあります。  
でも自分が選んだ一日を今日も送りたいです。

To's job



今回表紙を作らせていただきました。  
普段は鉄の溶接を作っています。  
作品を展示します→平成22年12月21日～27日福岡市美術館市民ギャラリー



マチコ=  
メスシリンダー

中学生の時、理科の実験でメスシリンダーを使いましたが、私は手を滑らせてうっかりそれを割ってしまい「お前はもう触るな！」と言われた思い出が…。  
ツイッターやってます☆ アカウント：maaatch

## 星屑書房について &メンバー募集！！

星屑書房は好き勝手に表現活動をしていく文化系サークルです。

現在は、フリーペーパーの制作・配布が中心ですが、今後は幅広く、文化系活動をしていく予定です。

本を読むことが好き。本を自分で作ってみたい。

映画を観ることが好き。映画を撮りたい。・・・などなど、文化系趣味を持つ人々をつなぎます。

社会人が中心ですが、誰でも入会OK！「こんな活動してみたい！」という提案募集中心☆

少しでも興味を持たれた方はこちらにご連絡ください！ [stardustbooks@live.jp](mailto:stardustbooks@live.jp)

お待ちしております！

☆星屑書房ホームページ：<http://stardustbooks.soragoto.net/>

フリーペーパー『創星』3号

<http://p.booklog.jp/book/58895>

表紙デザイン : To's job

著者 : 星屑書房

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/stardustbooks/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/58895>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/58895>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社ブクログ

